

## 唯識文献研究の過去と未来

袴谷憲昭著『唯識思想論考』を読んで思ったこと

松田和信

本書が出版されたのは二〇〇一年八月である。刊行後すでに五年を経て、新刊として紹介し、その感想を述べるには遅きに失しているに違いない。しかし本書に対しては、筆者の知る限り、平成十三年（二〇〇一年）十月二十七日付『中外日報』紙に掲載された現在東京農業大学の山部能宜氏の書評が見られるのみである。あまりに巨大すぎて、あるいは著者の舌鋒の鋭さゆえ、誰も尻込みして、批評はおろか賛辞を口にすることすら気が引けているのかもしれない。筆者は、本書に収められた十八編の論文のうち、一九七四年以降の十六編を、さらにその中の一九七八年以降の論文については著者から直接の恵送を受けて、それらが刊行された直後に拝読させていただく幸運に浴してきた。さらに唯識研究を越えて、その後の批判仏教や仏教教団史研究の論文に至るまで、著者の思索の展開を見つけてきたところの、日本の仏教学界における最も熱心な読者であることを筆者は自認して、隠すつもりは全くない。今回、著者の袴谷教授が所属されていた駒澤短期大学の閉鎖にもなつて、最終号となる本誌に何れかの著作を選んで書評を書くように編集部より依頼を受けた時、筆者が躊躇なく選んだのが本書である。筆者の見るところ、十八編の論文の中

核部分は一九七六年から七八年にかけて書かれている。これは今から三十年近く前の、筆者が大学院修士課程に入つて唯識文献研究を志し、様々な論文を読み始めたまさにその時であった。現在の筆者は唯識研究から遠く離れてしまつたが、当時の筆者にとつては、すべてに驚異的な論文であった。従つて、あこがれにも似た気持ちでこれらを読んだ筆者に本来の意味での「書評」が書けるとは思いもしないが、これらの論文が生み出された同時代を生きてこができた幸運な世代の一人として、唯識研究については「無仏の世」を生きているかもしれない現在の研究者の方々のために書評に代わる短い紹介文を綴つておくことにしたい。

本書の内容は、一九六九年から一九九二年にかけての二十三年間に発表された、六本の書評を含む五十三編の唯識に関する文献研究と思想研究の論文の中から十八編を選び、それらを内容から「文献と伝承」「文献研究」「思想研究」の三部に配して、書き下ろしの序論と索引等を附して一書としたものである。便宜上ここで本書に収められた十八編に通し番号とそのオリジナルの発表年月をつけ、前後も含めて一覧すれば以下の如くである。

唯識文献研究の過去と未来(松田)

まえがき

唯識思想関連拙稿既刊目録

序論

インド仏教思想史におけるYogācāraの位置(書き下ろし)

第一部「文献と伝承」

- (一) 瑜伽行派の文献(一九八二年二月)
- (二) 敦煌出土チベット語唯識文献(一九八五年八月)
- (三) チベットにおけるマイトレイヤの五法の軌跡(一九八六年十一月)
- (四) 唯識の学系に関するチベット撰述文献(一九七六年十月)

第二部「文献研究」

- (五) 三乗説の二典攷 *Akṣarā śī-sūtra* と *Bahudhātuka-sūtra* (一九八一年六月)
- (六) *Bhāvasaṃkrāntisūtra* 解説および和訳 (一九七七年十月)
- (七) 五種の修習に関する諸文献 和訳および注記 (一九七二年十二月)
- (八) アーラヤ識存在の八論証に関する諸文献(一九七八年三月)
- (九) *Viniścayasamgrahaṇī*におけるアーラヤ識の規定 (一九七九年三月)

(十) *Mahāyānasūtrālaṅkāraṭīkā* 最終章和訳(一九八三年三月)

(十一) 玄奘訳『撰大乘論釈』について チベット訳との比較による一考察 (一九六九年十二月)

第三部「思想研究」

- (十二) *Pūrvācārya* 考(一九八六年三月)
- (十三) 滅尽定 唯識説におけるその歴史的意義 (一九七五年三月)
- (十四) \**Mahāyānasamgraha* における心意識説(一九七八年三月)
- (十五) 唯識説における法と法性(一九七四年十二月)
- (十六) 唯識説における仏の世界 四種清浄法の構造 (一九七六年三月)
- (十七) 三種転依 考(一九七六年十月)
- (十八) 清浄法界 考(一九七六年十一月)

あとがき

索引

右記一覽だけに漫然と目をやると、本書は著者の既刊論文を寄せ集めただけの、いわゆる「著作集」あるいは「選集」といった体裁のありふれた書籍の一種と思われてしまうかもしれない。しかし本書カヴァーの帯に「それぞれの時点で注目を浴びた旧稿が今や全仏教史の視野のもとに著者自身の手で甦る」とあることが

らも想像できるが、本書は既存の個人論文集の体裁とはおおいに様相を異にしている。(九)(十)以外の十六編の末尾には「研究余史」と名付けた補足が附され、オリジナルの出版時点から本書刊行の直前に至る当該論文にかかわる新たな資料の追加、訂正、補足等がこれでもかというほど附されているのである。中にはこの「研究余史」だけで新たな論文といえるものさえ見られる。例えば(十四)に附されたそれなど。また(十一)のようにオリジナルの時点では紙幅の都合から用意された全文あるいは口頭発表時の資料が掲載されていなかったものを、今回その全文をあらためて掲載したものもある。さらに(十三)のようにオリジナルは英文で発表されたものを著者自身によって和訳して掲載されたものもある。

またこれら十八編をまとめるために書き下ろされた序論「インド仏教思想史におけるYogācāraの位置」において著者は「仏教思想史における唯識思想の確立者たるYogācāraの位置」を全く新たな視点から行つ(まえがきiii頁)している。この序論の内容を一言で紹介することが許されるなら、著者がいうところの「内在主義」に肩入れしていた時に、内在主義に他ならない唯識思想を研究し、それを克服して対極の「外在主義」に立つ現在の著者にとって、過去の内在主義的論文が著者自身によって如何に評価されるかを批判的に述べたものといえる。本書の十八編はすべて純粋な学術論文であることから、内在主義といわれても、表面的には、それが誰の目にも自明の理であるとも思えないが、これに関して筆者が鮮やかに思い出すのは、一般向けの書と

して書かれた当時の著書『人物中国の仏教 玄奘』(桑山正進氏と共著、大蔵出版、一九八一年)の中で、唯識思想と如来蔵思想にとつて紙一重の、しかし決して越えることのできない差をめぐつて独白されている著者の言葉である。当時著者はこう書いていた。

・・・清浄法界とアローヤ識を基盤とするわれわれの現実の心がまったく異質のものであるという見方は、玄奘の唯識説ならざるとも、唯識思想である限りは必ず認められる立場なのである。・・・中略・・・玄奘唯識においては絶対矛盾の自己同一的視点がまったく欠如していることを指摘しなければならぬ。アサンガのように、絶対的な矛盾にはじつと耐えながら、ありえない異質の世界との同化を果たすというような姿勢ははなはだ希薄になる。(同書三二二頁)

今から思うとこれが内在主義というものであったのであろうか。筆者の手許にある本のそこには赤線が引かれ、この文章に接した当時の感激を今に伝えてはいる。文献学的な確かさと厳密さに裏付けられた論述に加えて、思づかいさえ感じさせる著者の言葉は他を完全に凌駕していた。本書の序論を読むと、現在の新しい読者はある意味とまどいを覚えるのかもかもしれない。それによつて著者の過去の論文を今となつては意味のないものとみなしてしまふのかもかもしれない。しかし筆者は違う。文献研究の点でも、思想研究の点でも、これら十八編は今なお全く輝きを失っていないばかりか、この序論によつて、批判仏教に始まる著者の現在の研究に何の違和感なく繋がつてゆくものともさえ思う。アサンガが矛盾に耐えたなどという表現は今の学界では恐らく著者以外には絶

対に誰にもできないことである。

話を戻すが、現在の筆者には、ここで十八編すべてについて内容を紹介し、それにコメントを加えるなどということとは、物理的にも精神的にもできる状況にはない。ただ本書の序論に先立つ「まえがき」には十八編について簡単に内容が著者自身によって紹介されている。しかも前述の如く、各論文の末尾には詳細な「研究余史」までついている。これはある意味、著者自身によって各論文に書評が附されて本書が成立しているともいえる。一体、筆者が新たな書評を行う必要などどこにもないようにさえ思える。ただいくつかの点で強調しておきたいことはある。

まず(十四)について、これは本書の中では最も長編であり(全百十六頁)、さらに著者の修士論文の一部でもあるというのであるから、著者にとつては本書の中核となる重要論文であろうと思われるが、これに附された「研究余史」によると、本稿における二つの主張のひとつは、その後の諸氏の反論により撤回された形となつてしまつている。旧稿をそのまま手をつけずに掲載し、それに新たな論文とさえいえる余史を附して反論に答えて自説を訂正し、さらに\**Muktaka-sūtra* (四阿含から脱落した仏教聖典のこと)についての詳細な調査も記した著者の姿勢に、研究の絶えない進展とその醍醐味を見る思いがする。余談であるが本論文は筆者が著者から抜き刷りとしていただいた最初のものであって、筆者にとつても思い出深いものである。しかし当時著者が取り上げた『撰大乘論』の一節をまともに読んでいなかった筆者は、白状すると、著者の論述に完全にはついて行けていなかった。従つ

て、筆者自身は当時の他の方々のようにこれに反論することはできなかつたのである。

次に(九)について、十八編の中からただひとつを選べと求められれば、筆者は間違いなくこれを選択する。本論文に当時筆者は衝撃を受けた、『瑜伽師地論』撰決択分』の部分異訳である真諦三蔵の『決定蔵論』に現れる「阿摩羅識」なる訳語を、著者は第九識などではなく、転依したアーラヤ識を真諦三蔵が単に音写語のような体裁をとつて漢訳したと強く示唆したのである。これは前述の『玄奘』の中では断言されている(同書二百三十七頁)。まさに宇井伯寿先生以来の\**amala-vijñāna*のまぼろし。すでに死語になつていられるかもしれない言葉で表現すれば、これは唯識研究にとつての新たなパラダイムの出現であつたと思つ。この衝撃が現在の本書の読者に果たして分かつていただけであるだろうか。著者なくして、一体誰が「阿摩羅識」が\**amala-vijñāna*の音写語ではなく、真諦三蔵の漢字による造語であるなどと看破することができたであろうか。この一事に筆者は著者の天才を感じずにはいられなかつた。

さらに(三)について、これは(十五)に附された研究余史と併せて見る必要があるが、マイトレーヤが実在の人物でないこと、単にアサンガの信仰上の存在であつた未来仏としての弥勒であることを解き明かすヒントを与えてくれた論文であつた。それに付随して、マイトレーヤの五法』のひとつである「法法性分別論」もアサンガと同時代の文献ではなく、はるか後代の偽書であることを筆者にも考えさせてくれる論文であつた。

ここでは、順不同で筆者に特に思い入れの深い三編を紹介した

だけであるが、それだけに価値があるのでないことは読者の皆さんも恐らくお分かりのこととは思ふ。唯識文献を研究し、その思想を追求するというのであれば、本書に収められた十八編と序論を読まずしてそれを行うことはありえないことである。確かに本書を含む著者の膨大な論文すべてのいちいちを網羅することは不可能であるかもしれない。さらにその膨大さゆえ、多少の誤植や誤記等があるかもしれない。その事実をもって著者の論文を批判する人もたまに見かけるがとんでもない思い違いである。こと唯識研究を旨とするのであれば、高価ではあるが是非本書を入手して手元に置いて欲しいと思ふ。

先に述べたように、現在の筆者は唯識思想研究に特に強い関心があるわけではないが、唯識文献自体に対する関心は今も以前と変わらない。専らこの十数年の筆者の関心は、密教以外のさまざまなインド仏教文献そのものの探求、つまり漢訳やチベット語訳でしか残されていない、あるいはすでに失われた仏教文献の原典写本の外面的探求にあつたが、この筆者の関心事からすると、唯識文献の原典を巡る状況は今後劇的に変化して行くことが予想される。唯識文献は、本書を見ても明らかになように、その多くはチベット語訳として伝えられている。古代中国における仏典翻訳事情と異なり、それらのチベット語への翻訳に使用された、あるいはチベットに持ち込まれた原典写本は、かつてラーフラ・サンクリトヤーヤナが報告した以外にも、とうやら無事チベット自治区の各所に保存されているようなのである。唯識文献そのものではないが、(六)の *Bhāṣasambhāṣitā* については、ポタラ

宮で最近になって梵文写本が発見されている。ウィーン科学アカデミーのチベット自治区発見梵文写本プロジェクトのウェブページ ([http://www.oew.ac.at/las/index\\_en.htm](http://www.oew.ac.at/las/index_en.htm)) にその旨の記載と、研究出版が予告されているので参照していただきたい。さらに同じウィーンのプロジェクトでは、同じくポタラ宮から発見されたヴァスバンドウ(世親)の『五蘊論』とそれに対するステイラマティ(安慧)の注釈書、およびこれも唯識文献ではないが、関係の深い『俱舍論』に対するこれまた同じステイラマティの注釈書『真实義』の梵文写本の出版を目指す研究も開始され、前者についてはゲッテンゲン大学の女性研究者ヨヒタ・クラマー博士が、後者については大谷大学の小谷信千代教授がその責任を担われている。なお筆者はこれらの写本写真をすでに見る機会を得ているが、前者のうち、ステイラマティの注釈書の方は一葉の欠落もない完全な写本であり、『五蘊論』自体は第一葉を欠く、後者は第二章「根品」の中期から第四章「業品」の中期までを欠く不完全なものであるが、残された部分だけでも巨大である。『真实義』全体の約三分の二の梵文テキストが回収されることになる。さらに書体も古く、九世紀を下ることはない。

また筆者に関して言えば、かつて筆者はロシアのサンクトペテルブルグに保存されている『瑜伽論』「撰決抄分」の梵文写本断簡(漢訳にして二巻分ほど)について報告した(『日本西蔵学会々報』三十四号)。これは今から百年前にチベットからロシア皇帝ニコライ二世に贈られたものであったが、この残り部分もどうやらラサに無事保存されているらしい。つまり、本書(八)(九)に取り上げられた『瑜伽論』「撰決抄分」の文章は、近い将来が

遠い将来か定かではないが、いずれ我々研究者が研究に使用できる日が来る可能性が高いのである。蛇足ながら「撰決択分」の写本が完全な形で存在するといふことは、その中に全文引用される『解深密経』も梵文で読むことができるようになるということである。しかし残念ながら本書でも多く取り上げられた『撰大乘論』の梵文写本はいまだ発見されていないと聞く。これらすでに発見されている梵文写本だけでも公表される時には、著者のような梵文原典を欠くことによる長大な文献操作をする必要もなくなり、唯識思想研究を巡る状況も今と大きく変わってゆくのかもしれない。

最後に一言記しておきたい。いかなる心境の変化があつたのか、筆者の想像で言うことは控えるが、恐らく著者は本書に収められた論文が発表されて以降、学会や研究会等の公の席で研究発表されることを意図的にやめてしまわれたように思う。各学会も退会し、学術講演等の依頼もすべて断っていると聞く。恐らく駒澤大学以外では、東京在住の方々の間でも、特に若い研究者にとつては著者の顔も分からず、今やその存在自体が伝説化しているのではないかとの危惧を覚える。かつて著者の論文を読み、学会発表を拝聴して高揚感を覚えた筆者の気持ちも、今の若い方々にもぜひ味あわせてあげていただきたいとささやかに願う。本書では筆者の名前も諸所に触れられているが、これまでの筆者との直接あるいは手紙等でのやりとりを通してわずかでも著者の論文によりよい訂正を加えることがあつたとすれば、同じことはこれからも他の若い研究者との間で可能なはずである。そうするのが

著者も育てられたはずの人々と、後に続く研究者たちへのわずかばかりの貢献ではないか。今でも筆者は、袴谷教授こそ戦後の日本の仏教学界が生んだ最高の知性であると信じて疑ってはいないのだから。

（A5判、xiv + 840頁、本体価格一六、〇〇〇円、大蔵出版、

二〇〇一年八月二〇日刊行）